

楽しく仕事をする

与えられた仕事を精一杯するためには、第一に楽しく仕事をするることである。

楽しく仕事をすれば苦境も佳境となる。

楽しく仕事をするには、ただ努めるのみではなく仕事を好きにならねばならない。

松下幸之助も、「好き」ということは、何をやるにしても一番大切」（『指導者の条件』p 106）と言っている。渋沢栄一は、この「好きになる」ということを「趣味を持つ」という言葉で表現し、次のように述べている。

およそ業は勤むるに精しく、嬉しむに荒むというが、万事がすなわちそれである。もし大なる趣味と大なる感興とをもって事業を迎えられたならば、たとえいかに忙しく、またいかほど煩わしくとも、倦怠もしくは厭忌というがごとき、自己が苦痛を感じる気分の生ずべき理由はない。もしまたこれに反して、全然没趣味をもってイヤイヤながら事務に従うという場合には、必ずまず倦怠を生じ、ついで厭忌を生じ、次で不平を生じ、最後には自分がその職を抛たねばならぬようになるは、けだし数の自然である。前者は精神澆刺として愉快の中に趣味なるものを発見し、この趣味によりして無限の感興を惹起し、感興はやがて事業の展開を来たすことに至るものである。しかして事業の展開はすなわち社会に公益を与えることになる。後者は精神が萎縮して怏々鬱々、倦怠より困憊を醸し、困憊はやがてその身の滅亡を意味することになる（「ただそれ忠恕のみ」『論語と算盤』）

渋沢の「およそ業は勤むるに精しく、嬉しむに荒むというが、万事がすなわちそれである」という言葉は、『論語』雍也第六の二〇に、「之を知る者は之を好む者に如かず、之を好む者は之を楽しむ者に如かず（知っているというのは好むのに及ばない。好むというのは楽しむのには及ばない）」を下敷きにしたものである。

仕事が好きになれば、精神澆刺として愉快に日々を過ごせるようになる。どんなに忙しくとも、また煩わしいことがあったとしても、愉快に過ごしていれば苦痛を感じることはない。その中で、「この仕事はこうしてみたい。こうなったらこうしてみよう」といった色々なアイデアを加えることが出来る。そこに無限の面白さが広がり、面白味はやがて新たな事業の展開へと進展し、延いては社会に公益をもたらすことになる。

それは、単なる営利に寄与するということではない。面白味には味わいが伴い、必ず精神が伴うようになる。精神が伴うからこそ事業として展開し、社会に公益をもたらすことが出来るようになるのである。また、精神を伴う事業を趣味とすれば、おのずから歴史や文化に通じ、温故知新となって人間性が豊かになるのである。

一方、仕事が好きでなければ精神が萎縮し、倦怠・困憊となり、困憊はやがてその身の滅亡を招くことになる。即ち、仕事が好きにならなければ、あるいは仕事が単なる“労働”に化した時、人間の精神は衰えてしまうのである。精神の衰えは肉体を蝕み、また自分の運命にも影響を与えてしまう。

仕事が好きになるには、先ず好きな仕事に就くことである。そのためには、「志」を高く掲げて流行に惑わされないことを基本とする。次に、「今を生きる」ことである。人生の3

分の1から2分の1は仕事の時間である。この時間を無為に過ごすことは勿体ない。与えられた時間の中に心身を集中させることによって、見えないものも見えて来るし、知らないことも知るようになる。そこに面白味が生まれるのである。

かつて筆者は某支店の長として赴任した折、「楽しく仕事をしよう。10年後にこのメンバーが再会した時、思い出話に花が咲くような仕事をしよう」という着任の挨拶をしたことがある。人生を振り返った＜あの時＞は二度と繰り返されることはない。＜あの時＞は人生の財産であり、その財産は「今」を真剣に生きることによって得られるのである。

因みに、高い志を持ち続けるところに「今を生きる」意欲がわいてくる。高い志があれば、些細な仕事であってもすべて大きなことに関わっていることに思いが及び、あらゆることに好奇心を持つ。そうなれば、その時々職場で、「これだけはやり遂げた」と後々までも思える実績を上げられるのである。